

ド、コータン地方には、從來學者の想像したよりも遙かに盛な勢で回教文化の行はれて居たものであることを知り得るに充分であらう、但し此の形勢を以て、支那領トルキスタンの東北部地方に迄及ぼすことは、いふ迄もなく不當である、高昌を中心とした地方のウイグル人は尙ほ佛教マニ教を奉じ、同種族ながら回教を奉じたカシユガル地方のものに取つては、信仰上の仇敵であつた。

## 七 結 尾

前數項に述べた外、更にかゝる方針の下に論述し紹介すべき事項は決して少々ではない、美術史風俗史歴史地理上の研究等、數へ來れば逸す可らざるもの甚だ多い、更に中亞發見の史料によつて、支那の歴史的事實の闡明せられたものも少くない、此等を一々こゝに略述するが爲に紙面の割讓を請ふことが不可能ではないにしても、それは此の一篇に於る當面の目的ではない、たゞ上に述べた所によつて、東洋史殊に塞外地方の歴史の研究に従事して居るものが、輓近主として如何なる方面に努力し、その學問の趨勢が如何なる方向を取つて居るかの一斑を窺ひ得れば足りるのである、漢史を研究し、これに依て支那以外の東洋諸國の史蹟を探る外に、新たに得られたる、若しくは得らるべき此等諸國の史料の研究によつて、從來の知識の上に一步を進めやうとして居るに外ならぬ、従つてこれが研究者に取つては缺く可らざる第一の武器は言語の知識であつて、これ無くば殆んど如上の大勢に伴ふて研究の歩を進めることは不可能なるのみならず、折角漢史に記されて居ることを正しく解釋することもまた覺束ないと言はなければならぬ。